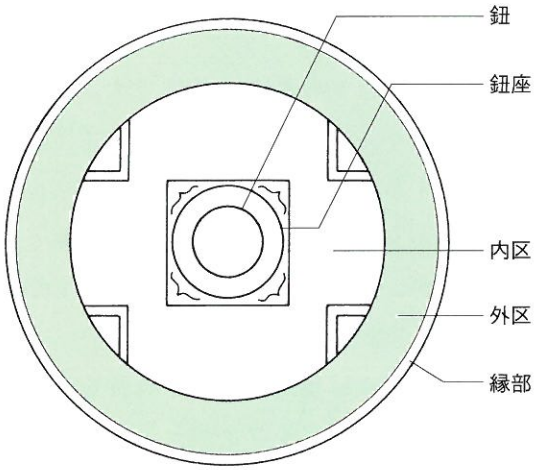
銅鏡観察への招待

1．銅鏡とは

銅鏡は銅・錫・鉛を溶かしたものを、鋳型に流し込み、製作します（鋳造）。冷えたら鋳型を外し、研磨して完成となります。銅鏡は中国で約4,000年前から用いられ、日本には楽浪郡の設置後、銅鏡が多く持ち込まれ、権威の象徴として用いられました。

2．銅鏡の部分名称

銅鏡は鏡面と鏡背からなり、鏡背の変化で時期を決めていきます。背の中央には鈕と呼ばれる突起があり、そこに紐を通して結ぶことができます。鈕から外へ向かって鈕座→内区→外区→縁部と名付けられています（第１図）。また、銅鏡には銘文を持つものがあり、その部分を銘帯と呼びます。なかには年号を記したものもあり、時期決定に用いられることもあります。

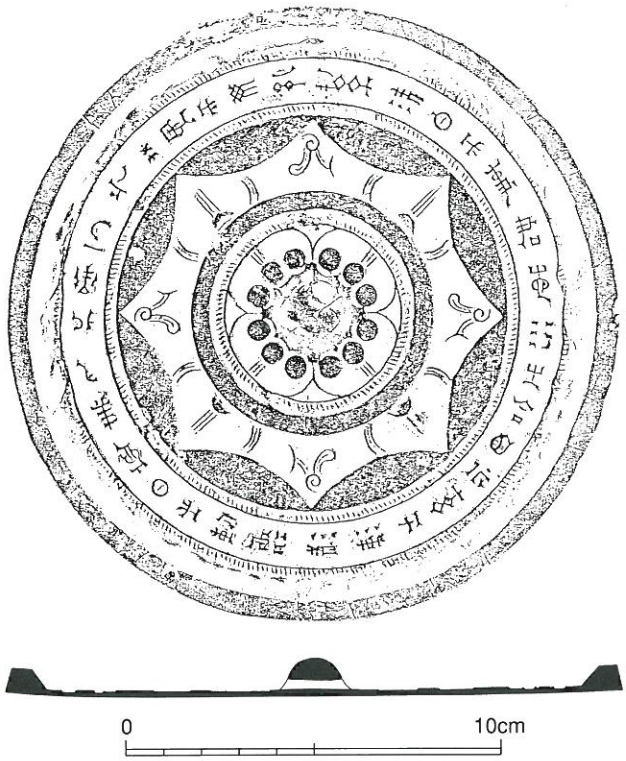


第1図　銅鏡の部分名称

3．連弧文鏡

連弧文鏡は前漢に数多く作られた銅鏡です。日本でも玄界灘沿岸地域に持ち込まれ、主に甕棺の副葬品として出土します。第２図は三雲南小路１号甕棺から出土した銅鏡で、銘文に「潔清白而事君…」とあることから、連弧文「清白」鏡と呼ばれ、現在は国の重要文化財に指定されています。

三雲南小路遺跡は江戸時代に発見され、大部分の遺物は散逸しましたが、福岡藩士の青柳種信が『柳園古器略考』を記し、前漢鏡が35面副葬されていたことが分かりました。この時期に銅鏡を多数副葬する墳墓は春日市の須玖岡本遺跡と三雲南小路遺跡のみで、後の奴国と伊都国を治めた王の墳墓であると考えられます。



第2図　三雲南小路１号甕棺出土連弧文鏡（径16.4cm）

4．方格規矩鏡

方格規矩鏡は前漢の終わりから王莽の新を経て、後漢まで鋳造された銅鏡です。江戸時代に発見され、今は謎の王墓と呼ばれる井原鑓溝遺跡は、大量の朱とともに刀剣、巴形銅器、鎧の板の如きもののほかに21面の方格規矩鏡が出土したと『柳園古器略考』にあります（第３図）。これには銅鏡の拓本も掲載されており、1/4以下の破片も多数採集されたことが分かります。

第４図は平原１号墓の３号鏡です。方格内に十二支銘があり、内区に四神が配されます。四神は方位を示すと言われ、東が青龍、西が白虎、南が朱雀、北が玄武です。この中で玄武は亀と蛇の合体形ですが、蛇のみで亀がいないものも平原１号墓出土品に含まれます。

また、内区には規矩文が配され背を８分割しています。規矩文がアルファベットのＴＬＶに見えることから、ＴＬＶ鏡とも言われます。内区の外の銘帯には銘文があり「尚○○竟真大巧…」と始まり、不明な２字がありますが、同型鏡の４号鏡には「尚方作…」とあることから尚方作鏡であると思われます。また、平原１号墓には「陶氏作竟…」で始まる陶氏作鏡があることも特徴です。

第5図　彩色のある鏡（6号鏡）

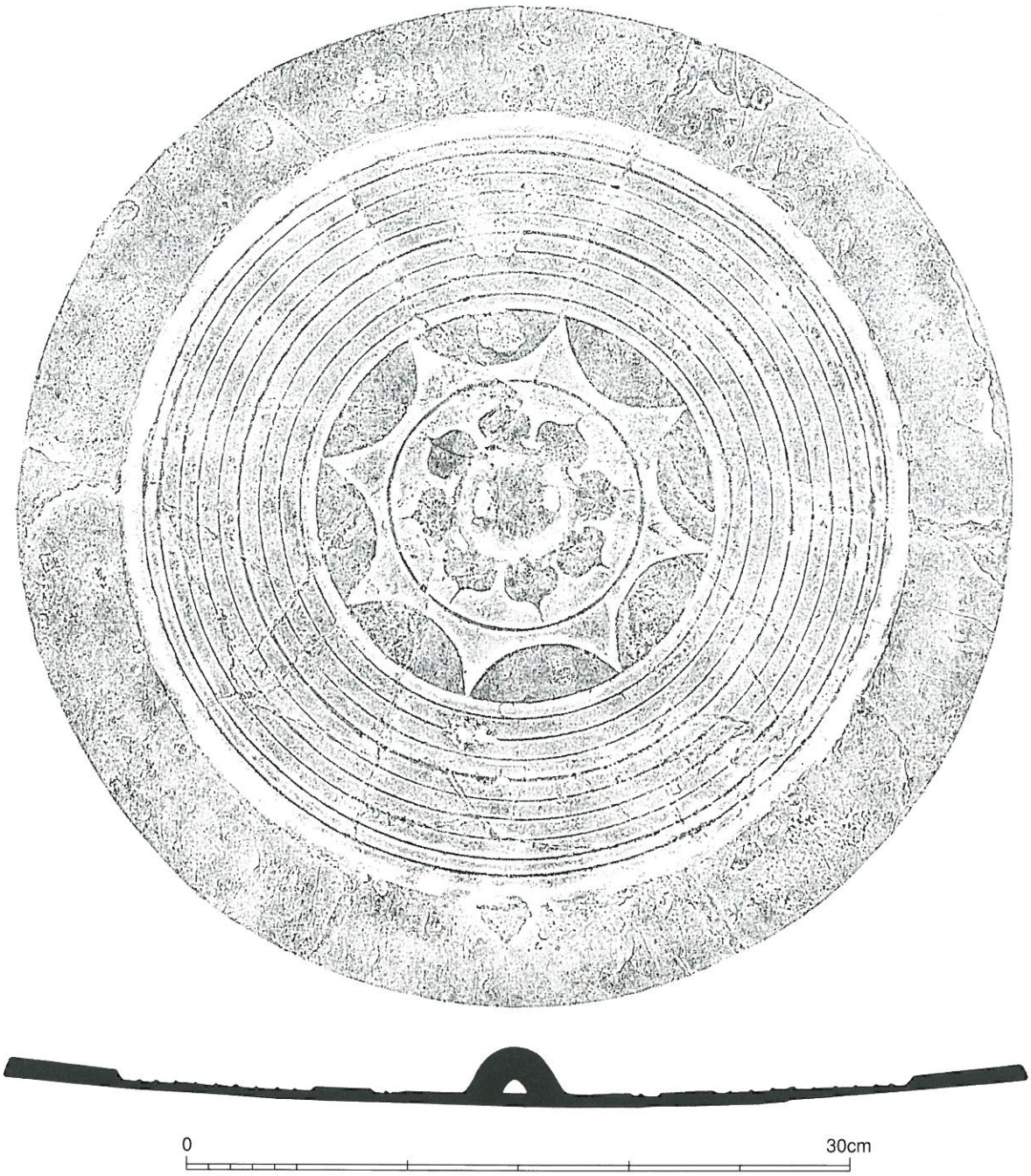
第3図　井原鑓溝遺跡出土銅鏡図

第4図　平原1号墓出土方格規矩鏡（3号鏡）（径21.0cm）

また、同型鏡が多く、６組14面確認されています。平原１号墓の方格規矩鏡は舶載鏡か、仿製鏡か意見が分かれていますが、いずれにしても一括して持ち込まれたことに間違いないようです。

なお、方格規矩鏡の何枚かには魚も鋳出だされているので見学の際にはぜひ探してみてください。

5．内行花文鏡



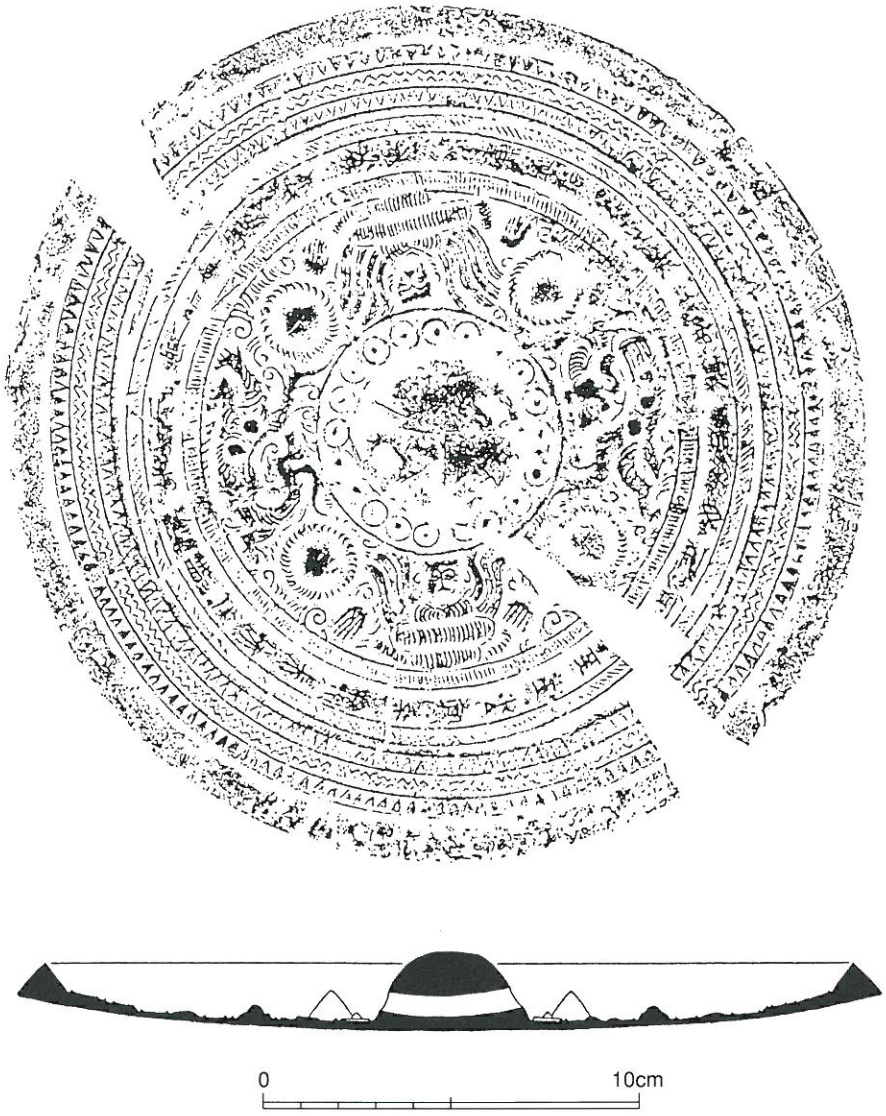
第6図　平原1号墓出土内行花文鏡（10号鏡）（径46.5cm）

第６図は前原市のシンボルにもなっている平原１号墓出土の内行花文鏡です。直径46.5㎝、重さ7,950ｇを測ります。古代中国では銅鏡を化粧道具の一つとして用いましたが、日本では権威の象徴とされ、王墓と呼ばれる厚葬墓には多くの銅鏡が納められました。また、本例は中国に例が無く、実用品とは言えないため、仿製鏡と思われます。

北部九州では朝鮮半島から伝わった武器形青銅器を祭器として用いたため、次第に大型化していきます。銅鐸も同じ経過をたどり、いずれも弥生時代の終わりには埋納されます。しかし、銅鏡は弥生時代後期に直径10㎝程度の小形仿製鏡が作られますが、本例はその系譜上に無く、突然巨大化したようです。

また、大型の仿製鏡は古墳時代にも継続して製作されることから、武器形青銅器や銅鐸とは性格を異にするようです。

6．三角縁神獣鏡



第7図　若八幡宮古墳出土三角縁神獣鏡（径22.5cm）

三角縁神獣鏡は第７図の若八幡宮古墳（福岡市西区）出土例のように縁の断面が三角形で、内区に西王母、東王父と神獣が半肉彫で表現され、20cmをこえる大型品が多いです。また、現在のところ中国では出土していないことから、様々な学説が出され、市民の関心も高い資料のひとつです。

糸島地域では一貫山銚子塚古墳が著名です。この古墳は全長103ｍを測る前方後円墳で、玄界灘沿岸で最大のものです。調査は1950年に京都大学の小林行雄氏を中心に行われ、主体部から10面の銅鏡が被葬者をとりかこむようにして出土しました。頭部付近には鍍金方格規矩鏡と内行花文鏡を、遺体の側面には４面ずつ計８面の三角縁神獣鏡を置いていました。いずれも20～22cmの大型鏡ですが、頭部付近のものと、側面のものとでは扱われ方が異なっていたと考えられます。

また、この調査により同笵鏡の分析を行った小林行雄氏はその起点が近畿の前方後円墳にあることを突き止め、古墳時代の研究をよりいっそう盛んにすることになりました。

伊都国歴史博物館
ITOKOKU HISTORY MUSEUM
〒819-1582 福岡県前原市大字井原916
916 IWARA, MAEBARU CITY, FUKUOKA, JAPAN PHONE：(092)322−7083 FAX：(092)321−9155